

日本語の非対立受身文の意味論的考察*

神田知哉

t.kanda.997@gmail.com

キーワード：受身 非対立受身 直接受身 間接受身 状態変化 意味論

要旨

日本語には、受身文の形式をとっていても、「仕事に追われる」のように統語的に対応する能動文が意味をなさない、あるいは不自然になるものが存在する。本稿では「非対立受身文」と呼ぶこれらについて、先行研究では受身文として認める立場とそうでない立場が存在する。動作主が示されない受身文の中にも「(状況に)置かれる」のように非対立受身文とみなせる例が存在するが、非対立受身文は何らかの外的な原因により主語の指示対象に状態変化が生じるという、受身文全体と共通する重要な意味特徴を持つことから、受身文と捉えるべきである。また、非対立受身文は、受身文体系においては直接受身文と間接受身文の中間に位置するものである。

1. はじめに

日本語の受身文は（直接受身文であれば）能動文との対応があるものとされるが、実際には(1)のように、受身文の形式をとっていても、統語的に対応する能動文が意味をなさない、あるいは不自然になるものが存在する¹。

- (1) a. 二人の息子が交代で泊まっているが、仕事に追われて、十分な看病ができない。
(徳永進『カルテの向こうに』BCCWJ から)
- b. 好奇心に駆られて隼人は豆腐の金を払うと、源助の跡をつけた。
(森村誠一『虹の刺客』BCCWJ から)
- c. マスターの笑みにつられて、圭一も軽く笑みを返した。
(小杉健治『父からの手紙』BCCWJ から)
- (1) a.* 仕事が二人の息子を追う。
b.? 好奇心が隼人を駆る。
c.* マスターの笑みが圭一をつる。

* 本稿は、2021年度に東京大学に提出した修士論文の内容の一部を新たにまとめ直したものである。指導してくださった西村義樹先生にお礼申し上げる。

¹ 本稿では、直接受身文に対応する同数の項を持つ能動文が存在する受身文とし、間接受身文をそのような対応する能動文が存在しない受身文とする。(1)の受身文は「Xガ Yニ V-(ラ)レル」という形式を持ち、目的語をとる動詞が用いられているため、統語論的に、受身文の主語であるXを目的語、二格であるYを主語とする能動文（「Yガ Xヲ V」）を想定できる。このように、対応する能動文が統語論的には想定できるという点で、これらの受身文は直接受身文と共通している。

先行研究には、これらを受身文と認める立場と認めない立場が存在する。それを踏まえ、本稿ではこれらに対して詳細な意味論的考察を行うことで、その他の受身文との関連性を明らかにする。まず、2節では先行研究を概観したうえで「非対立受身文」の定義と分類を示す。3節では、動作主が示されない受身文の中にも非対立受身文と捉えられる例が存在することをみる。4節では動作主の有無にかかわらず非対立受身文全体の受身文としての意味を考察し、それを踏まえて5節では受身文体系における直接受身文と間接受身文との関係を示す。6節はまとめである。

2. 非対立受身文の定義と分類

2.1. 先行研究

益岡（2000: 61）は直接受動文の変種として(2)のような例を挙げ、「通常の直接受動文では二格が有情者の動作主を表すのに対して、これらの例においては、主体が、二格で表される非情物を機縁（原因）として何らかの心理的状态を経験するという事態が描かれて」おり、「対応する能動文よりも好んで用いられ」という特異な性質を持つことから、これらを特に「機縁受動文」と呼んでいる。

- (2) a. 日本中の農民は、連年の冷害凶作と、第一次大戦後の長期的不況に打ちのめされていた。
b. いきなりぼくは、言いようのない屈辱感におそわれた。
c. 彼は急に疲れにおそわれる。
d. 私は中学時代にこの歌に心を打たれた。
e. 私は志乃の鋭い語調に気押されて……。
f. 私はふいに声をはなつて泣きたいような衝動に駆られた。 （益岡 2000: 61）

また、林（2009）は対応する能動文を持たない「慣用的受身文」の性質として、以下を挙げている。

(3) 【慣用的受身文： Xガ Yニ V-(ラ)レル】

- ① 受身の形でしか表わせない表現のことであり、対応する能動文を持たない。
- ② 主語である「X」は「受け手」の立場にあり、「Y」から何らかの形で心理的影響を受けるのである。
- ③ 「Y」を省略することができないため、いつも「～ニ V-(ラ)レル」の形で現れる。
- ④ 「V-(ラ)レル」の意味は、複数の意味を持つVの一つの意味を受身化したのではなく、受身化した典型的意味からさらに派生したものとして考えられる。

(林 2009: 72-73)

その一方で、先行研究の中には能動文と対立しないものは受身文と認めない立場もある。村木 (1991: 195) は、「次郎は 火事に やけだされた。」や「次郎は 仕事に 忙殺されている。」のような例を挙げ、「みかけだけの受動文」と呼んでいる。また、村木 (2000: 133) では、(4)のような例は「受動動詞が用いられているものの、対立する能動文をもたないために、受動文とは考えにくい」ものであり、「受動文であるかどうかは、文構造に決定権があって、動詞の語形を絶対化するのはいくつか」とされている。

- (4) a. 『淋しい狩人』は傑作です。あれほどの作品ですから、できるだけセンセーショナルな紹介の仕方をするべきです。それでこそ、僕も報われるというものです。
 b. 私にできる仕事など限られていました。
 c. 小さな子供が好奇心にかられて万引きを行い、……

(村木 2000: 133) (下線原著)

2.2. 非対立受身文の定義

益岡 (2000)、林 (2009) はどちらも、能動文との対立がない場合も受身文の一種として扱っていたのに対し、村木 (2000) はこの場合は受身文とは考えられないとしている。「文構造に決定権がある」とする村木の論は統語論的観点からの議論だと考えられるが、1節で見たようにこれらは統語的には対応する能動文を作ることができるため、文構造の問題とは言い難い²。(1)のような例が受身文と認められるかどうかを議論するにはむしろ、意味論的観点によるべきであると考え。そこで、本稿では意味論的観点から、益岡や林と同じ立場で議論を行う。

ただし、益岡 (2000) の「機縁受動文」や林 (2009) の「慣用的受身文」はもっぱら主語の指示対象 (以下、主語) の心理的状态変化を表すものであり、能動文との対立がない受身文の全体を包括しているわけではない。心理的状态変化を表すもののほかに、神田 (2020, 2021) では、能動文との対立がない受身文として(5)(6)のようなものも存在することを指摘した。(5)は自然現象を表す名詞が二格をとっており、自然現象を原因とした主語の物理的状态変化を表す非対立受身文である。(6)は多くの場合テイルを伴って、主語の(半)恒常的状态や性質を表す非対立受身文である。神田 (2021) では、能動文との対立がない受身文の全体を捉えるため、これらの例も扱えるように、「対応する能動文について、統語論的には適格となるが、不自然な意味になる (意味をなさないものも含む)、あるいは自然でも能動文では用いられることが少ない受身文」を「非対立受身文」と呼ぶこととし、非対立受身文に用いられる動詞受身形 (動詞+受身接辞) を「非対立受身」とし

² 3節で見るような、動作主を伴わない「XガV-(ラ)レル」のような形式の非対立受身文についても、「XヲV」という形式の動詞句が統語的に想定できるため、やはり文構造が特殊なわけではない。

た。

- (5) a. はいている運動靴さえ、雨に打たれ痛痛しい程に傷んでいる。
(吉野道男『熱球児』BCCWJ から)
- b. 舟は惰性で走っていき、止まると、むしろ波にもまれて揺れた。
(立松和平『虹色の魚』BCCWJ から)
- (6) a. 中田には二歳年上の兄がいたが、つねに跡取りとして何人もの世話人に囲まれていた。
(中野不二男『脳視ドクター・トムの挑戦』BCCWJ から)
- b. 八幡神の由来は謎に包まれていますが、[...] ³
(小林康夫・船曳建夫編『知の技法』BCCWJ から)

また、林 (2009) では対応する能動文がないもののみを慣用的受身文としているため、「深い徒労感に襲われる」「罪の意識に襲われる」のような「襲われる」は、対応する能動文が成立するために慣用的受身文には該当しないとされている。しかし、実際には「〈感情〉に襲われる」という受身文も十分慣用的であり、「〈感情〉が襲う」という能動文による表現はあまり好まれない。このように、能動文と対応しないわけではないが、実際には対応する能動文より好まれる受身文が存在する⁴。本稿では、このような例も能動・受動の非対立として扱うこととする。

2.3. 非対立受身の分類

非対立受身には、形態論的観点から対応する能動形が存在するものだけでなく、存在しないものもある (神田 2021)。対応する能動形が存在する場合は統語的にも対応する能動文を想定できるが、そうでない場合はそもそも能動文自体想定できないことになる。

非対立受身である(7)の「追われる」「打たれる」「もまれる」「誘われる」には、それぞれ「追う」「打つ」「もむ」「誘う」という対応する能動形が存在する。これらは、動詞の本来の語義から意味拡張が生じて慣用的意味を獲得しているために、能動文と対応しないものと考えられる⁵。

³ この受身文に統語的に対応する能動文としては、「謎が八幡神の由来を包んでいる」のように「謎」を動作主的に捉えるか、「神が八幡神の由来を謎に包んでいる」のように「謎」を道具 (包むためのもの) のように捉えるかの二通りが想定できる。ただ、どちらにしてもほとんど意味をなさないものと考えられる。

⁴ 一般的な能動文と受身文の使い分けに関しては、共感度階層や名詞句階層を用いて説明ができる。しかし、能動・受動の非対立についてはこれらの階層だけでは説明ができない。詳しくは神田 (2021) を参照されたい。

⁵ このことは、シャミシエフ (2018) も指摘しているように語彙化として説明できる。この語彙化とは、認知文法で言う分析可能性の減少 (loss of analyzability) によるものである。分析可能性というのは、複合的表現について、各構成要素が表現全体の概念化にどれだけ貢献していると認識されているかである (Langacker 1987: 292)。複合的表現が定着すると全体がひとまとまりとして捉えられるようになり、各構成要素が意識されなくなって、分析可能性が減少する。非対立受身について言えば、動詞と受身接辞がその構成要素ということになる。次の「ひかれる」や「つられる」には「ひく」「つる」という対応する能

- (7) a. 二人の息子が交代で泊まっているが、仕事に追われて、十分な看病ができない。
 b. はいている運動靴さえ、雨に打たれ痛痛しい程に傷んでいる。
 c. 舟は惰性で走っていき、止まると、むしろ波にもまれて揺れた。
 d. 春の陽気に誘われて、河津桜を見るために、三浦海岸に行ってきました。

(Yahoo!ブログ、BCCWJ から)

その一方、非対立受身である(8a,b)の「打ちひしがれる」「気圧される」の無標形「打ちひしぐ」「気圧す」は、少なくとも現代語には存在しない。また、(8c,d)の「駆られる」「苛まれる」に対応する「駆る」「苛む」は現代でも存在するが、無標の形のまま用いられることはほとんどない。

- (8) a. 病院で意識を取り戻した彼女はデイビッドが死んだことを告げられ、悲しみに打ちひしがれる。
 (Yahoo!ブログ、BCCWJ から)
 b. 見たこともないほど張りつめた大智の表情に気圧され、瀬里は青ざめるしかない。
 (崎谷はるひ『耳をすませばかすかな海』BCCWJ から)
 c. 好奇心に駆られて隼人は豆腐の金を払うと、源助の跡をつけた。
 d. 義家は激しい後悔に苛まれていた。
 (高橋克彦『炎立つ』BCCWJ から)

これらの非対立受身は、そもそも能動形がない、あるいはほとんど用いられないため、対応する能動文も存在しない。ただし、歴史的には能動形が存在していたものも多く、それらは前節の例と同じく動詞の本来の語義から意味拡張が生じ、その後に能動形が使用されなくなったという可能性が示唆される。

3. 動作主なし非対立受身文

ここまで動作主⁶を伴う非対立受身文を見てきたが、日本語の受身文の用例には、そもそも動作主を伴わないものも多い(奥津 1983; 三井 1983 など)⁷。動作主は対応する能動文において主語になるものであるから、それを伴わないということは、統語的に対応する能動文自体存在しないと考えることもできる。

しかし、動作主を伴わない受身文のうち、(9a)のように前後の文脈や発話状況などから

動形が存在するが、受身接辞が付加された形で定着して分析可能性が減少することで、場合によっては自動詞と認められることもある。ただし、この場合でも4節で示す「何らかの原因により状態変化が生じる」(これらの例では心理的状态変化)という受身文全体と共通する意味を持っている。

- (i) わたしはあのデザインに惹かれて買いました。
 (Yahoo!知恵袋、BCCWJ から)
 (ii) マスターの笑みにつられて、圭も軽く笑みを返した。

⁶ 本稿では、典型的には動作主を指す二格名詞句のことを広く「動作主」と呼ぶこととする。

⁷ 三井(1983: 59)は、現代日本語の受身文において動作主を伴わない受身文が占める割合を(小規模ではあるが)調査しており、小説文・随筆文・論説文に見られた310例の受身文のうち、動作主を伴わない受身文は225例で約72%を占めていたとしている。

動作主が明らかな場合、(9b)のように動作主が不特定多数あるいは一般的な場合、動作主が不明な場合などは、動作主の存在が想定できる例である。したがって、(9')のように対応する能動文を作ることも可能である。

- (9) a. しかしこうやってあらためて相手を見ると、私などは軽くいなされるほかになきそ
うな百戦錬磨の40男の顔だった。
b. キューバの首府ハバナは曾ってカリブ海の真珠と呼ばれたことがある。
(三井 1983: 61, 65) (下線原著)

- (9') a. 相手が私をいなす。
b. 人々はハバナをカリブ海の真珠と呼んだ。

その一方、動作主が想定しにくい受身文も存在する。例えば、(10)はどちらも特定の動作主を想定することが困難な場合として三井 (1983) が挙げている例である。

- (10) a. ちょうど揺り動かされた水面からさまざまな物の形が浮びかかるようだ。
b. そして、そのひとつひとつの明るさの中には、それぞれ1人の女が封じこめられて、
(三井 1983: 62) (下線原著)

- (10') a. 水面を揺り動かす
b. 女を明るさの中に封じこめる

(10a)は「ちょうど〜ようだ」とあることから直喩であり、実際の出来事ではないために動作主は想定しにくい。また、(10b)も比喩的な表現であり、動作主は想定しにくい。どちらも「Xガ(Yニ)V-(ラ)レル」に対する「Xヲ(Yニ)V」という動詞句は(10')のように自然になり、合成的な意味を持つ。しかし、このような動作主が想定できない受身文の中でも、(11)の「置かれる」「問われる」は非合成的な意味を持ち、対応する(11)は動詞句として意味的に不自然であるか、受身文とは表す状況が異なる。この点で前節までの非対立受身文と一致しており、同じく非対立受身文の一種として包括的に論じる必要があると考える。本稿では、(11)のような受身文を「動作主なし非対立受身文」と呼ぶこととする。

- (11) a. 昨年発生した能登半島地震で、当市では多数の蔵が損壊し、漆器の数々が、行き場を失う状況に置かれました。
(『広報わじま』BCCWJから)
b. 日本の常任理事国入りに立ちはだかる中国との関係をどう打開するか。日本外交の真価が問われる。
(『読売新聞』BCCWJから)
- (11') a.*漆器の数々を行き場を失う状況に置いた
b.#日本外交の真価を問う

動作主を伴う非対立受身文と同様、動作主なし非対立受身文である(11)も慣用的意味を獲得している。(11a)は誰かが漆器の数々をどこかに置いたのではなく、漆器の数々がある状況に直面したことを表している。これは、受身文という環境で独自に、「置く」の本来持つ意味から変化が生じたものと言える。(11b)は実際に誰かが日本外交の真の価値そのものを問うという行為をしているのではなく、これから日本外交の真の価値が明らかになるということを表している。これらの例では、動作主を伴う「〈感情〉に駆られる」が一つの慣用表現となっているように、「〈状況など〉に置かれる」「真価が問われる」という形式で一つの慣用表現となっている。

また、動作主なし非対立受身にも対応する能動形が存在しないものがある。

- (12) a. しかし、レセプションで対面したサムは「良い作品をポスターに選んでくれたね」とにこやかに太くてやわらかな大きな手を差しのべてくれた。その瞬間に、すべての苦労は報われたのである。(松永真『松永真、デザインの話』BCCWJから)
- b. 私が神童と謳われましたはじまりは、かるた会なのでありました。
(川端康成『伊豆の踊子』BCCWJから)
- c. 身につまされてこっちまで気が滅入ってしまいそうだ。
(鮎川哲也『マーキュリーの靴』BCCWJから)

(12a)の「報われる」に対応する能動形「報う(報ふ)」は現代では用いられていない。(12b)の「謳われる」は現代語の「歌う」とは表記も意味も異なるため、対応する能動形「謳う」は存在しないものと考えてよいだろう。また、(12c)は「身につまされる」で一つの慣用表現と捉えられるが、「つまされる」に対応する能動形は存在しない。

4. 非対立受身文の受身文としての意味

本節では、前節までで見た非対立受身文全ての包括的な意味論的考察を行う。便宜上、ラレル形の非対立受身文とラレテイル形の非対立受身文に分けて考察する。

4.1. ラレル形の非対立受身文

非対立受身文には、自動詞文や形容詞文などの受身ではない形式でほぼ同じ事態を表現できる場合がある。

- (13) a. たまたまレベルの高い地域にホームステイできればよいのですが、そういった人たちは、積極的な人生を送っていて社交生活やボランティア活動に忙しく、[…]
(栄陽子『現代アメリカ留学事情』BCCWJから)
- b. ヘーエヴェーク通りを行き交う人々、観光に忙しくカフェには無関心。
(新堂冬樹『闇の貴族』BCCWJから)

(13) a.? そういった人たちは、積極的な人生を送っていて社交生活やボランティア活動に追われている

b.? ヘーエヴェーク通りを行き交う人々は観光に追われている

例えば、「仕事に追われる」などの「追われる」は「忙しい」という形容詞と意味的な類似が見られるが、(13)の例における「忙しい」を「追われる」に入れ替えることは難しい。この例において「忙しい」と共起している名詞句の指示対象は、主語の指示対象にとって必ずしも取り組まなければならないものではない。それに対し、「追われる」は不可避的に忙しくなり余裕がなくなるという状態変化を表し、共起する名詞は取り組む義務のある事柄を表すものに限定されると考えられる。このことは、辞書の記述にも「他のことを顧みる余裕もなく、その問題の解決・処理に当たらなければならない状況に陥る。」(新明解国語辞典 2020、強調は引用者による)のように反映されている。

この不可避的な状態変化は、何らかの外的な原因によるものである。動作主あり非対立受身文では、二格名詞句の指示対象が変化の原因となっている。(14a)では、仕事が原因となって二人の息子が余裕のない状態になっている。(14b)では、波が原因となって舟がバランスを取れない状態になっている。

(14) a. 二人の息子が交代で泊まっているが、仕事に追われて、十分な看病ができない。

b. 舟は惰性で走っていき、止まると、むしろ波にもまれて揺れた。

動作主なし非対立受身文も同様に何らかの外的な原因により状態変化が生じる。動作主を表す二格を伴わないためその原因ははっきりとは示されないが、文脈上で示されている事態や状況が変化の原因となっていると考えられる。(15a)では、地震の発生により多数の蔵が損壊したことが原因となって、(元々蔵に保管されていた)漆器の数々が行き場を失うという状況になっている。(15b)では、アメリカとイギリス本国との交易が途絶したことが原因となって、アメリカの経済が苦しい状況になっている。

(15) a. 昨年発生した能登半島地震で、当市では多数の蔵が損壊し、漆器の数々が、行き場を失う状況に置かれました。

b. 独立戦争(千七百七十五—八十三年)のあいだは、当然なことながら、それまでもっとも主要な貿易相手だったイギリス本国との交易は途絶した。そのためアメリカの経済は大きな苦境に立たされたが、[...]

(西村三郎『毛皮と人間の歴史』BCCWJから)

次の「問われる」や「試される」は、実際に誰かに問われたり、試されたりしているわけではなく、ある状況が原因となって問われたり試されたりするのと同じ状況になることが

表されている。一般的に、何かの価値や能力を問うたり試したりすることは、その価値や能力を明らかにすることになる。そこで、同じように価値や能力がこれから明らかになる状況にあることを表す(16)のような例においても「問われる」「試される」が用いられると考えられる。(16a)では、日本と中国との外交関係の状況が原因となって、まだ明らかでない日本外交の真の価値がこれから明らかになることが表されている。(16b)では、村財政の財源が逼迫しているという状況が原因となって、まだ明らかでない新村長の手腕がこれから明らかになることが表されている。

- (16) a. 日本の常任理事国入りに立ちはだかる中国との関係をどう打開するか。日本外交の真価が問われる。
- b. 村財政は財源がひっ迫し、新規の事業に取り組むのも容易ではない状況。新村長の手腕が早速試される。
(『北海道新聞』BCCWJから)

次の「限られる」や「絞られる」は主語の指示対象の範囲が狭まるという変化を表すが、これは何らかの事実・仮定が原因となり、それに基づく判断・推測の結果として実現している。(17a)はリーグ(セリエA)の勢いがなくなっているという事実による判断としては、優勝を争うチームも少数のみになるということを表している。(17b)は、空港が敵の手に落ちるといふ仮定による推測としては、交通手段が船舶のみになるということを表している。

- (17) a. かつては世界最高峰リーグと称されたが、それもいまは昔。優勝を争うチームもミラン、ユベントス、インテルなど少数に絞られる。
(『欧州サッカーリーグ最速ガイド』BCCWJから)
- b. 空港が敵の手に落ちれば、本土と島との交通手段は船舶に限られることになる。
(中村恵治『特務自衛隊新世紀ウォー』BCCWJから)

このように、ラレル形の非対立受身文は、何らかの外的な存在や状況を原因とする主語の指示対象の状態変化を表現している。動作主を伴わない場合は、その原因は文脈によって表されていることが多い。

4.2. ラレテイル形の非対立受身文

前節で見たように、ラレル形の非対立受身文は状態変化を表すと考えられるのに対し、ラレテイル形の非対立受身文が表す恒常的状态・性質については、実際に変化が生じているとは考えにくい。(18a)は八幡神の由来はわからないということ、(18b)は私たちが既存の住まいの構成を当たり前のものと考えているということ、(18c)は西側の自由主義諸国が良い境遇にあったということを表し、どれも変化を表しているわけではない。

- (18) a. 八幡神の由来は謎に包まれていますが、[…]
b. それだけ私たちは既存の住まいの構成にしばられている、ということもできます。
(藤原智美『たたかうマイホーム』BCCWJ から)
c. 千九百八十年代は、東側陣営の社会主義諸国にとって厳しい時代だった。それに比べれば、西側の自由主義諸国は恵まれていた。
(堺屋太一『先見後顧』BCCWJ から)

しかし、これらは Matsumoto (1996) の仮想変化表現 (subjective-change expression) の一種と考えることで、ラレル形の非対立受身文と同様、変化を表すものと捉えることが可能になる。仮想変化表現とは、実際には起こっていない変化を仮に想定し、ある状態をその変化の結果であるかのように表現するものである。

- (19) a. 葉っぱがたくさん落ちている。
b. 石がたくさん落ちている。 (Matsumoto 1996: 126)
(20) a. その部屋は丸くなっている。
b. 家が二軒くっついている。 (Matsumoto 1996: 124)

(19)は通常の結果表現であり、葉っぱや石が地上にあるという状況を落ちるという変化の結果として表している。それに対して(20)は仮想変化表現であり、部屋の形状や家の位置に関して、あたかも変化が起きたかのように表現している。Matsumoto (1996)、野中 (2015) によれば、「仮想変化表現でいう変化とは、一般的な状態や理想的な状態からの変化」(野中 2015: 98) である。

Matsumoto によれば、仮想変化表現には(21)(22)のように日本語ではテイル形、英語では形容詞的受身が用いられる。これらは図1の図形について述べたものであり、四角や直線といった理想的な形からの逸脱を理想的な状態からの変化として捉えている。

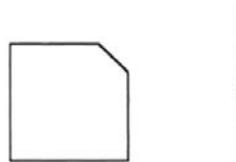


図1 (Matsumoto 1996: 134)

- (21) a. 角が {落ちている / 欠けている / 取れている}。
b. この線は切れている。
(22) a. a square with a corner {rounded off / cut off}

b. a broken line

(Matsumoto 1996: 134)

野中 (2015) によれば、次のような英語の例も仮想変化表現と考えられる。これらは行為やその動作主が想定できない形容詞的受身である。また、(23')のような対応する能動文が容認されない (野中 2015: 96-97) ことから、これらは英語の非対立受身文⁸だと考えられる。

(23) a. Her voice was loaded with meaning.

b. Her eyes were loaded with tears.

c. John was loaded with talent.

(野中 2015: 94)

(23') a.* Mary loaded her voice with meaning.

b.* Mary loaded her eyes with tears.

c.* Nature loaded John with talent.

(野中 2015: 96-97)

これらの例は、英語における場所格交替 (locative alternation) の構文の一つに該当する。場所格交替とは、物体をある場所に移動させることでその場所に変化が生じることを表す場合に、物体が目的語になる構文と場所が目的語になる構文の二通りで表すことができるという現象のことを指す。野中は前者の構文を「移動物目的語構文」、後者の構文を「場所目的語構文」と呼んでいる。

上の(23)は、場所目的語構文を元にして、出来事の結果として被動者がどのような状態にあるのかを描写する形容詞的受身を用いて表現されているにもかかわらず、先行する行為やその動作主が想定できず、単純な状態や属性を描写している⁹ (Laffut and Davidse 2002; 野中 2015)。野中 (2015: 98) は、英語の形容詞的受身が仮想変化表現として用いられることから、(23)のような例も仮想変化表現の一種だと言えるのではないかと述べている¹⁰。

同様に、(18)のような日本語の非対立受身文も仮想変化表現と考えられる。以下に再掲する。

⁸ 動詞的受身のみを受身と捉え、形容詞的受身はそもそも厳密には受身と考えない立場もあるが、本稿では受身の範囲を広く捉え、(23)の例を非対立受身文と考える。なお、仮想変化表現でない英語の非対立受身文としては、例えば以下のような例がある。Carter and McCarthy (2006: 802) は、これらをたいてい受身で用いられる動詞として記述している。

(i) **Were you born** in Bristol, Mary?(ii) They **were deemed unsuitable** as foster-parents.(iii) They **were taken aback** by the violence of the film's ending.

(Carter and McCarthy 2006: 802) (強調原著)

⁹ このようなことから、Laffut and Davidse (2002) は、場所目的語構文と形容詞的受身が組み合わせられた場合に、意味拡張が起こることがあるとしている。この意味拡張が起こるという点でも、日本語の非対立受身文との類似が見られる。

¹⁰ 野中 (2015: 98) は、仮想変化表現の一種とみなせる John was loaded with talent のような表現は、John was full of talent のような形容詞文と比べて、ある事態を通常の状態からの逸脱として表現することで、話し手の事態に対する意外性や感情を伝える機能を持っているとしている。これは、5節で見る、日本語の非対立受身文が主語にとっての (ネガティブな) 感情・評価を表すというのと似た機能だと思われる。

- (18) a. 八幡神の由来は謎に包まれていますが、[…]
b. それだけ私たちは既存の住まいの構成にしばられている、ということもできます。
c. 千九百八十年代は、東側陣営の社会主義諸国にとって厳しい時代だった。それに比べれば、西側の自由主義諸国は恵まれていた。

(18a)では八幡神の由来が不明な状態を由来が明らかな状態からの変化として表現しており、(18b)では既存の住まいの構成を基準に住まいの構成を考えるとということ、考えが制限されない状態からの変化として表現しており、(18c)では西側の自由主義諸国が良い境遇にあったことを他の国々（東側陣営の社会主義諸国）と比較することで¹¹、他の国々が置かれているような状態からの変化として表現している。このように、ラレテイル形の非対立受身文も仮想的な変化を表現していると考えれば、主語の指示対象の変化を表すものとして、ラレル形と統一的に捉えることができる。

5. 受身文体系における非対立受身文

田中（2019:352）は、日本語受身文の統一的な分析として、〈変化〉という概念を「数的に同一である個体が、異なる時点において（単一の時点であれば両立しない）異なる性質を持つこと」と規定し、受身文全体を「主語の指示対象が他者によって何らかの〈変化〉を被る事象を表す文」としている。また、西村・長谷川（2016:299）によれば、(日英語の)受身文のプロトタイプは、「主語の指示対象 X が（明示されないか付加詞で表される）他者 Y の（対応する能動文と共通する動詞が表す）働きかけの直接の対象になる（ことによって何らかの変化を被る）、という捉え方」を表すものである。非対立受身文では、田中や西村・長谷川の言う主語の指示対象に働きかける他者は存在しない。しかし、前節で見たように、非対立受身文も何らかの外的な存在や状況が原因となって、主語の指示対象が状態変化を被っていることを表現している。あるいは、恒常的状态・性質を表す場合でも、そのような変化を仮に想定することで表現している。非対立受身文では、この変化を表現するために受身文が選択されると考えることができる。

このように考えると、受身文全体と共通する重要な意味特徴を持つことから、やはり非対立受身文は受身文の一種と捉えるべきである。しかし、それに加えて、受身文体系の中でも直接受身文・間接受身文との関係をどう捉えるかという問題がある。益岡（2000）は、機縁受動文を直接受身文の変種だとしている。林（2009）は、直接に対応する能動文との対応の度合いを基準として捉え、慣用的受身文を他の「直接受身文」「間接受身文」「持ち主の受身文」とともに図2のように受身文体系の中に位置付けている。林によ

¹¹ 野中（2021）は、変化というのはある対象の一時点の状態と別の時点の状態を比較することで認識されるものであるから、変化という概念自体に比較という認知プロセスが含まれていると考えられ、比較を表すということが仮想変化表現の特徴づけとして重要だとしている。

れば、慣用的受身文は対応が想定できる能動文の形式が同じという点では直接受身文と類似しているが、その一方で能動文との対応度が低いという点では間接受身文と類似している。非対立受身文は、統語的には直接受身文と同じ構造をしており、(直接受身文の一種とまでみなせるかは別として) 直接受身文と大きな関わりを持つものであることは間違いないであろう。そこでここでは、間接受身文との関係を見る。

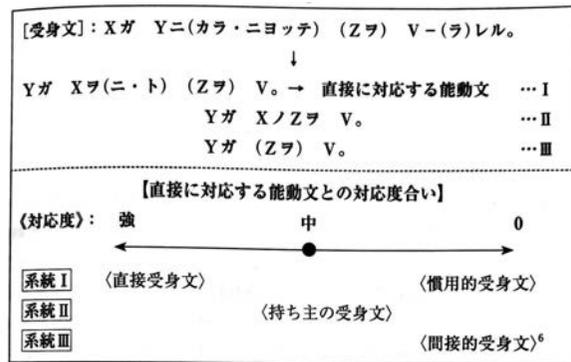


図 2 (林 2009: 61)

まず、非対立受身文と間接受身文は、後続文脈との関係性に類似が見られる(神田 2020)。高見(2011: 65-67)によれば、間接受身文は後続文脈で何らかの迷惑を明示する表現を伴うことが多く、その適格性を補強する役割を果たしている。

(24) a. √/?学生に廊下を走られた¹²。

b. 学生に廊下を走られると、研究の邪魔になる。

(25) a.*花子に歌を歌われた。

b. 花子に歌を歌われると、誰もがうんざりする。(高見 2011: 66) (下線原著)

(2425a)では、学生が廊下を走ったことが話し手の迷惑になったと推測され、迷惑を含意はするが、この文だけでは迷惑の意味を明示はしない。また(2526a)では、人が歌を歌うのは普通のことであり、花子が歌を歌ったことが話し手のどのような迷惑になったのかがわからない。それに対し、(2425b)(2526b)では「研究の邪魔になる」や「誰もがうんざりする」という迷惑を表す表現が追加されることではるかに適格性が高くなる(高見 2011: 66)。

非対立受身文についても、同様のことが言える。

(26) a. 好奇心に駆られて隼人は豆腐の金を払うと、源助の跡をつけた。

b. はいている運動靴さえ、雨に打たれ痛痛しい程に傷んでいる。

¹² √は無印と同様にその文が適格であることを示す。

非対立受身文の例である(2627a)では、好奇心が原因となって隼人が源助の跡をつけようという心理的状态になったことが「好奇心に駆られ(る)」に含意されており、後続文脈で実際にその行動を行ったことが述べられている。また、(2627b)では、運動靴に雨が降りかかったことが原因となって物理的影響を受けたことが「雨に打たれ(る)」に含意されており、後続文脈で運動靴が傷んだことが述べられている。これらは、後続文脈によって具体的な主語の状態変化が示されており、非対立受身文の適格性を補強しているものと考えられる。

また、他者からの直接的な働きかけではない何らかの外的な原因による、主語にとってのネガティブな感情・評価を表すという点も両者に共通するものである。間接受身文は、二格名詞句の指示対象(以下、二格名詞句)から主語への直接的な働きかけはないが、二格名詞句を原因として主語が被害・迷惑を被るという事態を表す。同様に、非対立受身文が表す事態についても、二格名詞句から主語への直接的な働きかけはない。そして、二格名詞句を原因とする、あるいは文脈で示された状況を原因とする、主語にとってのネガティブな感情・評価を表す場合が多い。心理的状态変化を表す非対立受身文は、「不安に襲われる」「悲しみに打ちひしがれる」など、そのほとんどがネガティブな感情を表すものである。動作主なし非対立受身文の「置かれる」「立たされる」は、状況に対してネガティブな評価を与えている場合に用いられることがほとんどである。また、「問われる」「試される」についても、現状に問題があるという文脈が多く、ネガティブな評価が含意されていると考えられる。

以上のような点から、非対立受身文は直接受身文と間接受身文の二つの性質を併せ持っており、受身文体系においては両者の中間に位置すると考えられる。

6. まとめ

本稿では、意味論的観点から日本語の非対立受身文について考察を行った。非対立受身文には動作主が示されないものも存在するが、動作主の有無にかかわらず、非対立受身文は何らかの外的な原因により主語の指示対象に状態変化が生じるという、受身文全体と共通する重要な意味特徴を持つことから、受身文と捉えるべきであることを指摘した。また、非対立受身文は受身文体系においては直接受身文と間接受身文の中間に位置するものであることを見た。

参考文献

Carter, Ronald and Michael McCarthy (2006) *Cambridge grammar of English: A comprehensive guide, spoken and written English grammar and usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

神田知哉 (2020) 「日本語の慣用的受身文の意味分析: 「仕事に追われる」と「雨に打たれ

- る」の比較から』『東京大学言語学論集』42: 117-129. 東京大学言語学研究室.
- 神田知哉 (2021) 「日本語の非対立受身文の定義と分類」『東京大学言語学論集』43: 69-83. 東京大学言語学研究室.
- Laffut, An and Kristin Davidse (2002) English locative constructions: An exercise in neo-Firthian description and dialogue with other schools. *Functions of language* 9: 169-207.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar, volume 1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- 林青樺 (2009) 『現代日本語におけるヴォイスの諸相：事象のあり方との関わりから』東京：くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』東京：くろしお出版.
- Matsumoto, Yo (1996) Subjective-change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases. In: Fauconnier, Gilles and Eve Sweetser (eds.) *Spaces, worlds, and grammar*, 124-156. Chicago: University of Chicago Press.
- 三井昭子 (1983) 「動作主を伴わない受身の態様」『ことば』4: 59-69. 現代日本語研究会.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』東京：ひつじ書房.
- 村木新次郎 (2000) 「ヴォイス」中村明 (編) 『別冊國文學』53: 132-135. 學燈社.
- 西村義樹・長谷川明香 (2016) 「語彙、文法、好まれる言い回し—認知文法の視点—」藤田耕司・西村義樹 (編) 『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ—生成文法・認知言語学と日本語学—』282-307. 東京：開拓社.
- 野中大輔 (2015) 「英語の場所格交替動詞の拡張用法：仮想変化表現の観点から」『東京大学言語学論集』36: 93-102. 東京大学言語学研究室.
- 野中大輔 (2021) 「仮想変化表現の射程」『第162回 日本言語学会大会予稿集』398-403. 日本言語学会.
- 奥津敬一郎 (1983) 「何故受身か？—<視点>からのケース・スタディー」『国語学』132: 65-80. 国語学会.
- シャミシエワ・ナズグリ (2018) 「語彙的ヴォイスと文法的ヴォイスの関係について：慣用的受身・使役表現に基づく分析」『日本語・日本文化研究』28: 72-82. 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻.
- 高見健一 (2011) 『受身と使役—その意味規則を探る—』東京：開拓社.
- 田中太一 (2019) 「日本語受身文を捉えなおす」森雄一・西村義樹・長谷川明香 (編) 『認知言語学を紡ぐ』343-365. 東京：くろしお出版.

辞書

- 山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井島正博・笹原宏之 (編) (2020) 『新明解国語辞典』第8版. 東京：三省堂.

コーパス

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (<https://ccd.ninjal.ac.jp/bccwj/>).

Semantic Consideration of Non-oppositional Passives in Japanese

Tomoya KANDA

t.kanda.997@gmail.com

Keywords: passive, non-oppositional passive, direct passive, indirect passive, change of state, semantics

Abstract

Japanese has passive-like sentences (e.g. *shigoto ni owareru*) (called “non-oppositional passives” in this paper) that do not have readily acceptable active counterparts. While some previous studies have regarded these as passives, others have objected to that classification. This paper argues that, while some of these sentences (e.g. *jōkyō ni okareru*) cannot be accompanied by phrases specifying agents, they can and should be regarded as passives, on the grounds that they have the following key semantic feature in common with bona fide passives: the referent of the subject undergoes a change of state caused by something external to it. It is further suggested that non-oppositional passives can be considered to lie in between direct passives and indirect passives in the whole system of passive constructions in Japanese.

(かんだ・ともや)